

# マスメディアと会話分析

—CNN Larry King Live Show の視覚的考察(Visual Analysis)—

池田 佳子

## 1. はじめに

本研究はテレビ番組の視聴者の行う活動の理解を探求する研究の流れ（上谷 1996; 山崎・西阪編 1997）をくみ、視聴者に提示されるマスメディア・ディスコースはどのようなものであるか、会話分析を用いて浮き彫りにしようとするものである。本稿では、(マス)メディア大国アメリカで討論番組として息の長い Larry King Live Show という生中継討論番組のディスカッションのディスコースを事例として考察を進める。

メディア・ディスコースを分析するアプローチはひとつではない。言語学的分析、社会言語学的分析、会話分析、記号論的分析、批判的言語学、社会記号論、社会認知的分析、文化生成的分析法など多彩な分析方法がメディアを介した談話を扱っている (Fairclough, 1995; Bell & Garret 1998)。例えば、Fairclough(1995)が提唱するメディア・ディスコースの分析(Critical Discourse Analysis, CDA)は、メディアの中で表現されている言説や語り、また広くはメディアについての言説(discourse)や語りも研究対象とする。会話分析(conversation analysis, CA)を用いたアプローチでは、メディア上対話にその考察の焦点を絞り、対話の参加者がどのような言語行動をとり、どのような当該社会の規範的な秩序がそこに表象されているのかを探ろうとする。CDA, CA の両者とも、異なる側面からメディア・ディスコースの理解を促すうえで大変効果的である。本研究が参考にするのは後者の会話分析の視点である。

メディア上でのインタラクションは、視聴者にその会話が露呈していることを前提に展開する。音声情報のみが伝達されるマスメディア媒体もあるが、テレビではインタラクションの全貌が画面に映し出されることになる。さらにメディア制作者がどの対象を、どのアングルから、どの様な配分バランスで画面

に映し出すのかを操作することでそのインタラクションの「全貌」は多様化する。マスメディア・ディスコースは「見せるための談話」であることは否めない。「見せる談話」は、インタラクションの参与者（話者）として実際の談話を構築していく者と、それを視聴する者という関係を構築する。本稿では、この2種の関係者が経験するマスメディア・ディスコースの相違について考えていく。

本稿では既存のメディア・ディスコースの考察を単純に踏襲するだけに留まらず、従来の研究では比較のおざなりとなりがちであった二つの存在について考慮しながら議論を進めていく。その2つとは、①「創作者としてのマスメディア」と、②実際の対話場面には存在しないが対話参与者らの行動に大きな影響力を持つ「視聴者」である。会話分析を用いた先行研究では、マスメディア上（例えばテレビ）で交わされる対話もただ「会話参加者自身の理解とオリエンテーションに位置づけ直して解釈しよう」とされてきた（Heritage & Clayman, 2002 [山田 2004:72 訳]）。しかし、本稿で見ていく Larry King Live Show のインタラクションはそれだけでは説明がつかない。本稿第4節で考察する「スプリット・スクリーン・ショット(split screen shots)」という画面分割の技巧がその一例である。この技法は、対話参加者同士が体験するインタラクションとは少し異なる相互行為現象を視聴者の眼前に作り出してしまう。テレビ画面を見る者は、その新たにできあがった相互行為の場の「立ち聞き者(overhearer)」となり、非直接的な形でそのインタラクションに取り込まれる。この現象の理解を会話分析の視点から分析しようとする、マスメディア・ディスコースの「emic（イーミック）な理解」とは何を意味することになるのか、再考する必要性が出てくる。本稿では最終節においてこの点に立ち返りさらなる考察を進めていくことにする。

## 2. 研究の背景

### 2.1 会話分析におけるマスメディア・ディスコース分析

会話分析の研究プログラムは、音声や画像として記録した会話をトランスクリプトとして書き起こし、発話の展開の細部に注意を払い考察することで当該の会話現象を理解するというやり方をとる。会話分析では、どんな分析も会話参加者自身の理解とオリエンテーションに位置づけ直し解釈しようとする（山田 2004）。これが先ほど言及した emic（イーミック）な記述の所以である。

会話分析研究は1960年代に始まっているが、マスメディア・ディスコースへの関心は80年代に入ってから盛んになった。筆者の管見の限りでは、80年代の初期にテレビ放映された政治家の演説資料が取り扱われたのが最初である(Atkinson, 1984 他)。その後も研究が展開し、1988/89年には当時のアメリカ大統領選挙時の候補者のテレビ・ディベート(Bush vs. Rather)の分析が *Research on Language in Social Interaction* という学術誌において特集が組まれた(Clayman & Whalem, 1988/89 他)。政治談話の他にも、ニュース・インタビュー、ラジオ番組のトーク、Call-in 相談など、様々なマスメディア上で展開する会話へ関心が広がっていった。現在も多彩な局面から研究が行われている。例えば、2002年には、Heritage と Clayman による *News Interview* が出版され、テレビニュースにおけるインタビューの特性を、何が日常会話の「規則」や「秩序」と異なるゆえに特殊な対話が展開するのか、というミクロな視点からわかりやすく解説されている。2005年出版の Hutchby による *Media Talk: Conversation Analysis and the Study of Broadcasting* も、聴衆参加型トーク番組(The Oprah Winfrey Show 等)における司会者の役割など、テレビ番組ならではの特徴が対象となっており興味深い。これらの成果が本研究で日本のマスメディア・ディスコースを微視的な視点から調査する上で基盤となる。

## 2.2 テレビ番組視聴という社会的実践(practice)

テレビ番組は、その存続には視聴者の存在が必要不可欠である。したがって「視聴者」の理解、もっと具体的に言えばテレビ視聴という活動を理解することはマスメディア研究の主要な研究課題である。近年のマスメディア・ディスコース分析の研究の動向として、メディア・テキストと視聴者との間で何がおこっているのかということを改めて新しい視角から捉えようとする傾向があげられる(上谷 1996,1997; 藤田 1988 他)。テレビを視聴するという活動を我々が行う時、どのようなことが展開しているのだろうか。この視点では、ただ単に一方方向に情報が画像と音声として視聴者の頭の中に「流れ込む」のではなく、メディア・テキストを前にして視聴活動を行う「実践者」として、画面に登場する人物に一定の(視聴する価値があるという)「資格」条件を見だし、彼らの身に起こっている出来事を(視聴者である我々にとって)何らかの意味のある出来事として理解する、という「社会的実践活動(practice)」を行っているのだと考える(上谷 1996, 1997)。言い換えれば、視聴者である我々もテレビの画像

に映る人物達とある一種の相互行為を構築しながらテキストの解釈をしているということである。本稿では、この視点を参照し視聴者を独立した客体として乖離させることなく談話データ（Larry King Live Show）を見ていく。

### 3. 本調査概要

#### 3.1 Larry King Live Show

アメリカに居住した経験がある者であれば、Larry King Live Show を知らない者はいないと言っても過言ではないだろう。Larry King Live Show は 1985 年にアメリカで放送開始となった、Talk Show というジャンルの嚆矢的存在の番組である。アメリカ合衆国の 3 大民営ネットワークの一つである CNN の定番組となって既に 20 数年が経つ。ホスト役を務める Larry King は CNN で最も著名なテレビ・パーソナリティで、現在までに行ったインタビューの数は 40,000 以上と言われている。本稿では 2007-2008 年に放映されたものを資料とした。

1)

#### 3.2 「スプリット・スクリーン・ショット (Split Screen Shots)」

メディア・ディスコースの中でも生中継で放映される討論という、新聞や編集を帯びたニュース報道とはその特徴が大きく異なるものである。時間制限のある中、複数のパネリスト達が入りし、Larry King と議論を交わす。その議論は時には穏やかな質問調であり、またある時は激しい問責に変わることもある。Larry King だけではなく、パネリスト達同士が直接お互いの意見を交わすこともある。番組の常態の対話設定では、パネリストはスタジオに実際に登場し、Larry King の向かい側に着席し会話を行う（本稿図 3 参照）。しかし、場合によってはパネリストが事情によって遠隔地から参加することもある。この場合、テレビ中継を駆使して遠隔のパネリストも時差なくスタジオにいる参加者たちと会話ができるよう工夫がなされる。図 1 に SSS の一例を示す。向かって左側が Larry King、そして右側が 2008 年アメリカ大統領選挙において John McCain と共に共和党の副大統領候補として戦った Sarah Palin である。この放映は大統領選挙の結果共和党の敗戦となり数日しか経っていない 2008 年 11 月 12 日になされた。現在アラスカ州知事である Palin は本拠地アラスカからニューヨークにいる Larry King と中継を通じて議論を行っている。



図1 Larry King(左)と Sarah Palin(右)

本研究で着目したい現象は、この図1に見られるような画面分割の提示法「スプリット・スクリーン・ショット(split screen shot)」が使用されている箇所である。図1を見ると、Larry Kingは対話の相手から目線をそらし何かを読み上げているにもかかわらず、Palinはカメラに向かって笑顔をたたえた姿勢でLarry Kingの発言を聞いている。この分割された画像を「二人のやりとり」として視聴者は見るわけである。

Larry King Live Showのみに留まらず、この画面分割法「スプリット・スクリーン・ショット(split screen shot, 以下SSSと呼ぶことにする)」の手法はアメリカのマスメディアの様々な場面で見かける。最も身近な例では、2008年アメリカ大統領選挙候補者ディベートでこの手法が利用されている。図2は第3回の大統領候補ディベート(2008年10月15日)の時のスクリーン・ショットである。Barack Obamaが司会者からの質問<sup>2)</sup>「Are you willing to say face-to-face what your campaigns have said about your opponent? (あなたは、相手について選挙キャンペーンにおいて非難していることを面と向かって当事者に直接言うことができるか?)」に答える間、共和党大統領候補 John McCainが民主党大統領候補 Barack Obamaを凝視しながら少し不満気味な表情で聞いている様子が映し出されている。



図2 第3回アメリカ大統領候補者ディベート

このような分割画像とともに、参加者はどのような会話を展開しているのだろうか。また、この提示法で映し出される「イメージ」は、実際の会話の参加者同士の直接的なやりとりの様子とどのように異なってくるのだろうか。以下、実際の談話データに見られる言語行動とSSSの画像を対照させながら検証していく。

#### 4. データ分析

本研究で扱った Larry King Live Show の談話資料でSSS場面が多く観察される場合、パネリストとして参加するものが遠隔地にいる、つまり中継で繋げることでその参加者との対話が可能になるという状況であることがまず基本条件となっている。パネリストの数などの付加要因も考慮すると、いくつかの類型化が可能であろう。本稿ではその中で2つの対象的なケースを取り上げる。以下、そのケース毎の会話分析を行う。

##### 4.1 ホスト—中継で参加のパネリストの場合

第1のケースは、ホスト(Larry King)はスタジオから、そして単独のパネリストが遠隔地から中継で参加する場合である。先ほどの Larry King vs. Sarah Palin、そして Michael Moore<sup>3)</sup> との対話の場面の2つの例を分析していく。例1は Sarah Palin が Larry King の質問の前置きに受け答えをしているシーンである。トランスクリプト中、二重下線箇所が展開とほぼ同時期に映し出されていることを示す。[[ ]] はSSSが使用された画像の開始と終了を示す。<sup>4)</sup>

## 例1 Larry King vs. Palin (2008年 11 月 12 日放映)

1 KING: [[ All right. Our new CNN Opinion  
 2 Research Corporation poll shows  
 3 that (1) 49 percent of adult  
 4 Americans have a favorable feeling  
 5 about you, (.5)  
 6 43 percent an unfavorable.  
 7 In retrospect, do you think you  
 8 might have hurt the ticket?  
 9 PALIN: (2) (2) If I hurt the ticket at all  
 10 and cost John McCain even one vote,  
 11 I am sorry about it, because John  
 12 McCain is a true American hero. [続  
 13 く ]



(1)



(2)

画像 (1) は下線(1)の部分の両者を映し出している。Larry King が、CNN が独自で行った意識調査の結果を述べている部分である。3-5 行目「49%のアメリカの成人はあなたに対して好感を持っている」という意見を King が読み上げるのを聞きながら、Palin は笑みをたたえている。一方、7-8 行目で「(選挙を) 振り返ってみて、投票数に (自分の存在が) ダメージを与えたと思うか」という批判的な質問をされた直後、2 秒間のポーズの後 Palin が回答を始める。画像(2) は、そのポーズの間を映し出している。画像(1)と比較すると、Palin の表情は堅く目線が少し高くなっている。一方 King は Palin を直視し、批判的な質問とは裏腹に冷静沈着に回答を待っている。このように、SSS の手法によってターン毎の両者の刻一刻のバーストショットがテレビ視聴者の眼前に登場する。さらには、両者の詳細な表情の変化を同時に観察することができる。

例 2 では、ゲストである Michael Moore とこの放映の直前に行われた共和党大会についてのやりとりの 1 箇所であるが、その中で SSS が使用されている。SSS は 7 行目の King の発話から始まっている。

## 例 2 Larry King vs. Michael Moore (2008 年 8 月 6 日放映)

1 MOORE: that people there at the Republican  
 2 Convention would be very upset  
 3 about. But, boy, to go there and do  
 4 that, I just -- I hope he enjoys his  
 5 seat on the minority side of the

6 aisle come January.  
 7 KING: [[ There was one name -- one name  
 8 never mentioned at the convention --  
 9 did it surprise you -- the name of  
 10 Dick Cheney?  
 11 MOORE: Yes, they brought me up, but not Dick  
 12 Cheney.  
 13 <sup>(3)</sup>What's that all about?  
 14 KING: hehha[hahaheh  
 15 MOORE: [well, of course, they don't  
 16 want to talk about Dick Cheney. He's  
 17 now the (.5) like the crazy old uncle  
 18 that they've hidden in the closet in  
 19 the basement. So they hope nobody  
 20 will talk about Dick Cheney. [続く ]



(3)

画像(3)は、Larry King が Moore の 12-13 行目の冗談めいた発言(「共和党大会で彼らは自分の名前は持ち出したのにディック・チェイニーの名前は出さなかった!」)に対して「笑い」で反応している様子を映し出している(14 行目)。ホストという役割は、番組の趣旨にあった話題を誘導する役割がある。さらに、自身の主観を挿入せずに会話を進行させる「司会者」という立場から、ゲストの発言に対して個人的な反応をしないことが多い (Greatbatch 1986; Heritage & Clayman 2002)。Larry King も同様に聞き手行動を抑えるのが通例となっているが、この Moore との対談においては「歓談」調で随分と自由な反応を示している。SSS の手法は、Larry King が頻繁に Moore の発言に対して言語的および非言語的な「笑い」で反応している様子を視聴者にもはっきりと映し出す。したがって、音声化されていない微笑やそれに伴うジェスチャーなども、視聴者にも認識可能なデータとなる。

遠隔地にいる参加者をテレビ中継で取り込むことと、SSS の手法を採用することは関連付いているようである。画像 (4) は、Obama アメリカ合衆国大統領夫人 Michelle Obama が Larry King Live に参加した際の 1 ショットである。双方がスタジオに居る場合、テレビ画面には図(4)のように Larry King が背中を向け、ゲストが中心となるような設定で映し出されることが多く、SSS は滅多に使用されることがない。図 4 のようなインタラクションの提示であれば、視聴者の視線は自然とゲストに集中するだろう。Larry King の反応に対して注目度が上がるのは、まさに SSS という特殊な画像設定の効果である。



図3 Larry King (左)とMichelle Obama (右)

#### 4.2 ホストスタジオ参加のパネリスト-中継参加のパネリストの場合

次に見ていくのは、ホスト(Larry King)と、複数パネリストの一部はスタジオに存在し、討論を進めていく間に、中継で新たにパネリストが参加するケースである。ホストだけではなく、スタジオ内の他のパネリストとも議論を交わす機会が設けられ、中継による参加者のバーチャル感覚で総合的なグループの一部として扱われる。このケースは日本の政治討論番組でも非常に頻繁に観察されるタイプの対話設定である。<sup>5)</sup>スタジオ内には、図5に示すように複数のジャーナリストがパネリストとして参列している。この放映回では、Larry Kingの代行役としてJimmy Kimmelがホストとして担当している。このグループに、中継でGawker.comという芸能ニュースのウェブサイト編集者の女性(Emily Gould)が途中参加をした場面から、SSSが使用された。



図4 司会のKimmel(左)と複数パネリスト達(右)

以下の例3では、スタジオの参加者の一人であるBragmanがホストのKimmel

に向かって発言をしている最中に、SSSによって Gould の表情が映し出される箇所から始まっている。

### 例3 Papparazzi (2007年4月6日放映)

1 BRAGMAN: There's also a big contradiction.  
 2 She said citizen journalism. She used  
 3 the word "journalism" and then <sup>(1)</sup>said,  
 4 "Everybody knows not everything is  
 5 true." Most journalists at least try  
 6 for the truth.  
 7 It's a goal  
 8 GOULD: (.3)I mean do you <sup>(2)</sup>read "US Weekly"  
 9 and expect that everything in it is  
 10 true or "Star."  
 11

12 BRAGMAN: I expect that they try. <sup>(3)</sup>I get  
 13 calls from them fact checking and I  
 14 don't from your website.



(1)



(2)



(3)

3-6行目で Bragman は「(Gould が)『全てが真実ではないことをみんな知っている』と言った」と批判を浴びせている。この発言中、Gould は批判の受け手が自分であるため、画像(1)が示すように口を一文字に結び眉をひそめた状態で Bragman の発言に聞き入る。その直後、8-10行目で「US ウィークリーを読む

で、記事の全てが真実だと思いますか（思わないでしょう）？スター誌だって同じことです。」と反論する。この時の Bragman の視線の方向を見てみると（画像 (2)）、この時点では Bragman の左側、テーブルの向かい側に位置するホスト(Kimmel)の方向を向いていることが分かる（図 4 のホストの位置を参照）。8-10 行目の Gould の反論を受け、Bragman はカメラ真正面に視線を向け（画像 (3)）、Gould に直接「あなたのウェブサイトを使って事実の確認はしない」と発言する。この対話の受け手の変化は、Bragman の 2 行目の発話では第三人称代名詞 she を用いて Gould を指示していたが、14 行目になると your website と第二人称代名詞の使用に変化している事からも確認することができる。

この受け手の変化に留意しつつ、ここで着目したいのは画像 (1) と (2) の SSS が視聴者に与えるやりとりの「イメージ」がどのようなものであるか、ということである。Kimmel vs. Bragman の対話設定では Gould の立場は第三者、Goffman (1981)の呼ぶ「立ち聞き者(overhearer)」となる。この第三者の立場の者と、話し手を隣り合わせで提示することで、Bragman のメッセージの受け手(=批判の対象)が誰であるのかがより明らかにされている。この時点における Gould の Bragman の発言を聞いた上で示す反応も事細かに観察できる。彼女の表情や目の動きなどは、Kimmel に目を向けて話している Bragman には伝わっていない。しかし、テレビ視聴者には「見える」のである。この細かな反応を画面に映し出すことで、Gould の存在は単なる overhear よりも強く提示されることになる。

12 行目（画像(3)）で初めて Bragman と Gould が直接やりとりを行う。その際にも、複数パネリストがスタジオにいるにも関わらず SSS の手法ではあたかも 2 者対面であるかのような錯覚を起こすような直接的なインタラクションのイメージを構築することができる。会話をしている本人達はその存在は重々意識した上で議論をしているのにもかかわらず、画面には 2 人のみが登場するので、司会者も、その他多数存在するパネリストの存在も一時期かき消されてしまう。このように、SSS によってテレビ視聴者が見るインタラクションは実際の設定と異なるという効果もあるのである。

## 5. ディスカッション

### 5.1 聞き手行動の露呈の「効果」

本稿で見てきた全ての事例に共通して観察できるのは、SSS の手法によって

対話に参加する者の話し手としての言動だけではなく、発話を受ける側の「聞き手」行動が視聴者により多く露呈するようになっていることである。例えば、例1と2ではLarry Kingの質問を投げかけ、回答を聞いている最中の非言語的シグナルが視聴者にもはっきりと見て取ることが出来る。

聞き手の行動をより多く提示することで、どのような効果があるのだろうか。例えば、例2におけるMichael Mooreの皮肉めいた発言(they brought me up but not Dick Cheney. What is that all about!?)であるが、SSSが使用されず、Kingの反応がかき消された談話として提示されていたとすれば、視聴者のMooreの発言の解釈は聞く者によって変化する可能性があるだろう。SSSの手法によってKingの聞き手としての反応(笑い)を見せることで、辛辣な発言ではなく冗談として理解するべきであると言うことが視聴者にも明示される結果となっている。

SSSが聞き手行動を映し出す効果は、対話の真正性を高める場合もあるが、逆に本来の対話の展開とは少し異なる「イメージ」を創り出す効果もある。例3では、ホスト-複数パネリスト-中継パネリストの対話設定におけるSSSの使用は、批判の標的となったウェブサイトの編集者Gould(中継パネリスト)を常時片側の分割画面に映し出し、彼女が受け手である無しにかかわらず発言者をもう片方に登場させている。こうすることで、視聴者は編集者(Gould)の表情の変化から非難中傷の発言に潜むより強い敵対性を読み取り、また参加者同士の対立を実際の場面に立ち会うよりも一層激しいものに見せる効果がある。マスメディアは、このような形で参加者達自身さえも構築しようとしていないインタラクションの「イメージ」を視聴者に提示することもあるのである。

## 5.2 メディアが映す「会話」は emic (イーミック) な情報か

上記の議論をさらに発展させると、冒頭で言及したマスメディア・ディスコースと会話分析の関係を改めて考える必要性にたどり着く。この議論の中核をなす概念は、Emic と etic な分析の視点である。Emic と etic は、アメリカの言語学者パイクが提唱した文化研究の2視点をさす対の概念である。語源は音素(phonemic)と音声(phonetic)の語尾で、emic は、研究対象とする個別の文化体系(言語体系を含む)の“内側”からみて潜在するシステム(または秩序)を発見する視点であり、etic は研究者が比較のために設けた、個別の文化体系にかかわらず外側から規準をあてはめて特徴を記述する視点を意味する。会話分析の基本となるのは「emic な情報」を抽出し、相互行為を展開するうえで参加者

自身がなにをリソースとしているのかを追求する姿勢である (ten Have 1999)。本稿で考察したテレビに映った会話は、SSS などのようなメディアがあえて創作した効果が加えられた産物である。生中継で報道しているので、会話のやりとりは即興的でありその場その場で参加者が協同で構築した自然な対話であることは間違いない。しかし、SSS のような提示法を経ることで、テレビを見ている話者達に参照不可能な情報が、視聴者にはレリバントなものとして前面的に押し出されることがある。例 3 で見たような第三者の聞き手行動や、発言の受け手が異なる場合でも隣同士に画面に提示されることで対話の距離感が近くなることなどは *overhearer* 的存在である視聴者にしかアクセスがない。

マスメディア・ディスコースの会話分析を進めるにあたり、誰にとって *emic* な情報を追求することが妥当なのかがここで再認識されるべきであろう。テレビ番組視聴という活動を、それを行っている「実践者」の立場から理解する(上谷 1996)ことが我々の到達点であるとする、我々は視聴者にとって *emic* な情報を分析しているのであって、会話参加者達にとって *emic* な情報だけを探求しているのではない。この意識を明らかにした上で会話分析という手法を応用し、視覚的分析(*visual analysis*)の視点をさらに取り込んだ研究の枠組みを構築していくべきである。

## 6. おわりに

最後に、今後の研究の方向付けを付記しておきたい。本研究ではスプリットスクリーン・ショットというテレビ放映の 1 手法がもたらす会話への影響について考察を行った。この SSS の手法意外にも、文字テロップやピクチャー・イン・ピクチャー(*Picture in Picture*)など多用な対話の提示の仕方が可能であり、現代のテレビ番組ではこれらの手法を伴う構成が当たり前になっている。マスメディア・ディスコース、とくにテレビ・テキストの研究を行う上で、これらの効果を見逃した分析は非常に偏った観察となってしまうだろう。冒頭で述べた視聴者の相互行為実践としてのテレビ視聴の視点を単なる参考枠とせず、視聴者が受け取るすべてを対象として研究を進めていくことが重要である。

## 注

- 1) テレビ番組で頻繁に SSS が使用される傾向が顕れたのはここ数年のことである。この観察はあくまでも私見であるので、今後の調査において検証したいと考えている。
- 2) 図 3 の画面下方部にも字幕スーパーとして質問内容が映し出されている。
- 3) マイケル・フランシス・ムーア (Michael Francis Moore, 1954 年 4 月 23 日~)。アメリカ合衆国のジャーナリスト・ドキュメンタリー映画 監督で『華氏 911』などの映画が著名。政治活動家でもある。
- 4) 本文中で示している SSS の画像は下線部周辺のためのショットであり、[[ ]]で示されて部分全体ではない。
- 5) 日本の政治討論番組におけるテレビ中継の使用と会話に与える影響については、研究を進めており、稿を改めて議論したい。

## 参考文献

- 上谷香陽(1996)「社会的実践としてのテレビ番組視聴」『マスコミュニケーション研究』49 巻 96-109.
- 上谷香陽(1997)「テレビ・イメージ」の社会的公正—見る実践における「討論」の組織化—山崎敬一・西阪仰(1997)「テレビイメージの社会的構成」『語る身体・見る身体』pp.235-253. ハーベスト社.
- 藤田真文(1988).「『読み手』の発見—批判学派における理論展開」『新聞学評論』37 号 67-82.
- 山田富秋(2004).「エスノメソドロジー・会話分析におけるメッセージ分析の方法」『マス・コミュニケーション研究』No.64: 70-85.
- Atkinson, J.M. (1984) Public speaking and audience responses: some techniques for inviting audience applause. In: Atkinson, J.M. & J. Heritage (eds.) *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis* (Pp.370-407). Cambridge: Cambridge University Press.
- Bell, A. & Garrett, P. (eds.) (1998) *Approaches to Media Discourse*, Oxford: Blackwell.
- Clayman, S.E. & J. Whalen (1988/89) 'When the medium becomes the message: the case of the Rather-Bush encounter', *Research on Language and Social Interaction* 22: 241-72.

- Fairclough, N. (1995) *Critical Discourse Analysis: the critical study of language*. London: Longman.
- Greatbatch, D. (1986) Aspects of topical organization in news interviews: the use of agenda shifting procedures by interviewees. *Media, Culture and Society* 8: 441-55.
- Heritage, J. & Clayman, S. *The News Interview: Journalists and Public Figures on the Air* (Studies in Interactional Sociolinguistics, 15). Cambridge: Cambridge University Press.
- Hutchby, I. (2005). *Media Talk: Conversation Analysis and the Study of Broadcasting* Open University Press.
- ten Have, Paul (2007). *Doing Conversation Analysis: A Practical Guide* (Introducing Qualitative Methods series) 2<sup>nd</sup> Edition. Thousand Oaks: Sage Publication.